

# 今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

矢野眞和 著

## 『「習慣病」になったニッポンの大学』

(2011年 日本図書センター)

### 誰が授業料を負担するのか

表紙の横帯に書かれたセリフがまず飛び込んできた。「授業料をタダにする。これが本当の改革だ!!」。そして「大学の『常識』をひっくり返せ!」というセリフが踊っている。よく見ると、「若者以外は入学しない新入生18歳主義」、「何となく卒業してしまう卒業主義」、「家計を圧迫しつづける授業料親負担主義」という3つの項目を並べ、それをアカバツで消している。このデザインに著者の主張が込められているのだろう。それにしても「授業料をタダにして、誰が費用を負担するのだろうか?」といった疑問を持ちながら、本書を読み進めた。ところが中身は真っ当な分析、診断が続き、頷くところも多い。また誰が負担するのかという点については、書評子の下手な解説をするよりも、読者に読み取ってもらいたい。そして読者も一緒に考えてもらいたい。

### 日本の当たり前は異例

世間の関心が定員割れを起こした大学が3割、4割だとか騒いでいるうちに、ニッポンの大学は3つの習慣病に罹ってしまったというのが著者の診断である。我々は大学生といえは18歳から22、23歳までと頭から決め込んでいる。しかしこれがいかに異例なことか、その事実を知っている人がどれだけいるだろうか。ろくすっぽ勉強していないのに、ほとんど全員がトコロテン式に卒業している。これも当たり前になっているが、きわめて異例なことである。

授業料の負担のしかたにしても、今までとはまったく逆の発想の方式が、現在あちこちの国で実験されている。在学中は授業料を一切払わなくてよい。それは国がいったん肩代わりする。その代わり働き始め、稼げるようになったら、その当人が国に返しなさいという「出世払いの方式」である。しかも一律定額を返せというのではなく、所得に応じて返済額が変わる方式である。「親



負担」から「当人負担」への切り替え、「一律負担」から「所得連動型負担」への切り替え、これが最近ではいろいろな国で議論され実験されている。

おそらくどこかの政党がこの方式を公約に掲げたら、絶対アピールすることだろう。日本では、子供は遊び呆けているのに、ケナゲな親が無駄を知らながら高い授業料を、辛抱強く払い続けている。この「ケナゲな親」こそ、日本が世界に誇れる貴重な社会資源である。親世代はこの「政府肩代わり方式」、「子供当人の後払い方式」に、こぞって賛成することだろう。

### 念入りに新方式のシミュレーションを

ただ書評子の目からみると不安がある。話としては結構だが、それで国家財政が持つかという心配である。それもここ数年のことではなく、10年後、20年後、30年後でも持つのだろうか? この仕組みは一度始めたら途中でやめられなくなる。ある年度を境に、恩恵に与かった世代とそうでない世代の損得をどうやって埋めるかで揉めることだろう。結局は次世代の納税者にツケを回すことになりはしないか?

ただ心配しているだけではしょうがない。ぜひ著者にシミュレーションを組んで、テストしてもらいたい。誰にとっても、10年先のゼニよりも、明日のゼニの方がはるかに切実である。いったい20年先の返済など、どれだけ信用できるのか? 返済額を所得に比例させるといっても、その所得は果たして正確に把握できるのか?

給与所得者は源泉徴収でがっちり吸い上げられるが、それ以外の人たちの所得は正確に把握できているのか、少なくとも給与所得者たちは疑っている。世間が強い警戒心を抱いているのは、目先だけのバラマキ政策である。そうした現代の気分にも応えるためには、シミュレーションが欠かせない。